安全保障資料　　２０１６．３．０７

ロシアの軍情報機関トップの暗殺の噂からみえるシリア情勢

― 懸念される“ロシア”と“トルコ＋サウジ”の対立―

主要点

シリア情勢を分析中、極めて興味深い情報（噂）に接した。今年１月初めロシア軍情報機関のトップが突然死し、その死因は心臓発作だという発表がなされていたが、最近になり、実は彼の死は暗殺だったという驚くべき情報がもたらされたのである。

その情報（噂）を通して見えてくるものは、シリアのアサド政権を巡る攻防のなかで、イスラム過激派組織 IS との戦いとはレベルの違う国際社会にも極めて大きな影響を及ぼす“ロシア”と“トルコ＋サウジアラビア”の対立・抗争の危険性があるという情勢である。

１　ロシア軍情報機関のトップの死―公式の説明
２　“暗殺”との報道―トルコが関与？
３　トルコとロシアの直接対決の恐れ
（１）出始めたトルコの地上侵攻論
（２）サウジアラビアの参加
４　シリアのアサド政権打倒に燃えるサウジアラビア
（１）対米工作
（２）対イスラエル工作
（３）対ロシア工作
（４）サウジアラビア―アルカイダ―イスラム過激派組織 IS の繋がり
５　トルコ―サウジアラビアの連帯を強める共通の要因―イスラム過激派組織？
６　ロシアとアメリカの主導下で停戦実現
7　不満を募らせるトルコとサウジアラビア
８　トルコとサウジアラビアによる停戦破りの懸念
（１）トルコの戦闘意思を抑えている要因
（２）無視できない武力紛争勃発の可能性
９　改めて問う、ロシア軍情報機関のトップの暗殺者は誰か？

シリア情勢を分析中、極めて興味深い情報（噂）に接した。今年１月初めロシア軍情報機関のトップが突然死し、その死因は心臓発作だという発表がなされていたが、最近になり、実は彼の死は暗殺だったという驚くべき情報がもたらされたのである。

その情報（噂）を通して見えてくるものは、シリアのアサド政権を巡る攻防のなかで、イスラム過激派組織 IS との戦いとはレベルの違う国際社会にも極めて大きな影響を及ぼす “ロシア”と“トルコ＋サウジアラビア”の対立・抗争の危険性があるという情勢である。

GRU 前総局長　イーゴリ・セルグン上級大将

１　ロシア軍情報機関のトップの死―公式の説明

ロシア連邦軍参謀本部情報総局（GRU）総局長イゴーリ・セルグン上級大将の突然の死（当時 58 歳）は、クレムリンの１月 4 日の声明で、次のように伝えられた[1]。

GRU 後任総局長　イゴリ・コロヴォフ中将

「ウラジーミル・プーチンは、イーゴリ・セルグンの突然の逝去に伴い、彼の家族と愛する人々に弔意を送った。」

また、電子情報「フォート・ルス」（1 月 6 日）は、彼はモスクワの自宅で１月 3 日に死去し[2]、彼の死体を検視した医者達は、過労による心臓発作だと伝えた。

1　同声明の後半で、「彼は全生活を、軍の士官候補生の時から GRU 総局長の勤務間まで、祖国とロシア連邦軍に捧げた。彼の友人と部下は、彼が真の軍の将校であり、経験に富む有能な指揮官であり、崇高な勇気と真の愛国心を持った男であったということを知っている。彼は、彼の職業意識、高い徳性、誠実、及び清廉さで尊敬された。」と記されている。

2　セルグン将軍の後任としてイゴリ・コロヴォフ中将が 2 月 2 日に任命された。

２　“暗殺”との報道―トルコが関与？

この公式発表では、ロシア軍の一要人が単に死亡したということだけであり、特に注目に値しない。ところが、最近になり、現地のレバノン日刊紙 al-Akhbar（3 月 3 日）が次のような報道を行ったことで、彼の死の意味は一変する。

「クレムリンは 1 月 4 日、GRU 総局長セルグンが心臓発作のためモスクワで死去したと伝えたが、彼はレバノンの首都ベイルートで秘密の業務を遂行中、1 月に殺害された。

2014 年 3 月、ロシアのクリミア併合で重要な役割を果たした同将軍は、噂によればシリアのアサド大統領の顧問を務めるようプーチン大統領の命令によってシリアに派遣された[3]。そして、その 3 週間後に死去した。

ロンドンの外交筋によれば、セルグンはアラブと中東の情報機関が参加する複雑な秘密の任務を遂行中に殺害された。

同外交筋は、セルグン暗殺にはシリアの戦線で各国間の緊張を増大させているトルコが関与しており、アンカラの関与の結果、トルコに対する対決姿勢をロシアが強めた可能性があると示唆した。」

３　トルコとロシアの直接対決の恐れ

（1）出始めたトルコの地上侵攻論

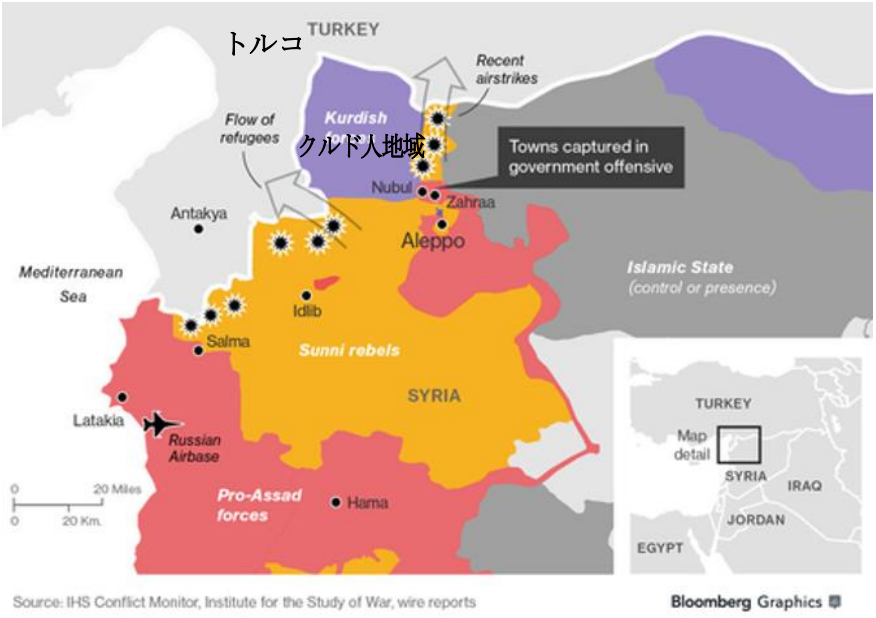
もしこれが事実だとすれば、昨年 11 月のトルコ軍機によるロシア軍機の撃墜事件で悪化している時期でもあり、ロシアとトルコとの関係は、当然、一層深刻化する。

それが予想される中で、クルド労働者党（PKK）をテロ組織とみなすトルコは、その姉妹組織と位置付けるシリアのクルド人組織（民主連合党 PYD）に対する攻撃（目下、トルコ領内からの砲撃主体）を一層強めようと、最近（2 月）、地上侵攻を口に出し始めた。

---

[3]　通常であれば、同将軍の出張は、国防相又は参謀総長の命令になるはずである。明らかにプーチン大統領の特別な指示の任務があったことを窺わせる。

シリア領のクルド人勢力支配地域



これに対し、ロシアはかねてよりイスラム過激派組織 IS との戦いを進めるため、シリアのクルド人組織（PYD）との連携を強めている。そして、アサド政権が承認しないシリア領内への空爆や地上侵攻は国際法違反であり、決して認められないとの立場を繰り返し述べ、トルコの動きを厳しく牽制している。

この両国関係にあって、暗殺事件は（事実だとすれば）、偶発的に起きる小規模な対決をも一挙に熱い紛争にエスカレートさせる恐れをもたらすことになる。

（2）サウジアラビアの参加

ロシアとトルコとの直接対決の恐れは、厄介なことに地上侵攻の意欲を隠そうとしないサウジアラビアの参加によって現実味を帯び始めていた。

実際、サウジアラビアは 2 月中旬までに戦闘機をトルコ（インシルリク空軍基地）に派遣した模様で、合同オペレーションルームも設置したと伝えられている[4]。

サウジアラビアは地上部隊も派遣しようとしたが[5]、アメリカの説得により、やむを得ず中止し、それは今のところ実現していない。

4　トルコのメディアは、トルコ軍の情報をもとにこのようなニュースを否定している。しかし、サウジアラビア軍報道官は、これを否定せず、アル・アラビア TV に戦闘機はシリアの ISIS に対する合同作戦に使用されると語った。

5　サウジのメディアは、「時には軍事力の行使が必要不可欠。米国が動かないなら、自ら動く」という論調が掲載されるようになっている。

４　シリアのアサド政権打倒に燃えるサウジアラビア

中東諸国の中で、シリアのアサド政権打倒に燃え、そのための活動を極めて熱心に行っている国家は、サウジアラビアだといってよい。

（1）対米工作

バンダル・ビン・スルタン王子

同国のバンダル・ビン・スルタン総合情報庁長官の時代（2015年１月解任)、彼は積極的に米国政界に接近した。ジョージ・W・ブッシュ政権時には、イラクのサッダーム・フセインやシリアのアサド政権、及びイラン政権の打倒を呼びかけた。その努力が実り？、イラクのフセイン政権は、アメリカ（軍）のイラク進攻によって、彼の思惑通り崩壊している。

米国で穏健なバラク・オバマ政権が誕生し、幾分、バンダルの野心は同米政権との間でギャップを生じ、ケリー国務長官の意向もあり（真相は不明)、バンダルは総合情報庁長官の職を解かれた。しかし、彼は依然サウジア政権にあって要職を占めており、同政府の対シリア政策（アサド政権の打倒）も変わらず、今なおアサド政権打倒に激しい熱意を見せている。

（2）対イスラエル工作

サウジアラビアはイランやシリア政権の打倒を見据えて、本来は宿敵であるイスラエルとも友好政策を取っている。

（3）対ロシア工作

バンダル時代、シリアのアサド政権の最大の支援者ロシアに対して、露骨なまでのアサド政権打倒の秘密工作を行った。

2013 年 8 月、バンダルはモスクワでプーチン大統領と秘密会談を行い、「もしクレムリンがシリアのアサド政権から手を引くならば、ロシアのグローバルな石油市場の支配と、来年のソチ冬季オリンピックを無事に執り行えるよう保証する。オリンピックの安全保障を脅かすチェチェングループは我々によって支配されている」と述べたという。

プーチンはその申し出を拒否した。しかし、これに懲りず再び 12 月モスクワに姿を現したバンダルはプーチンとの秘密会談で、アサド政権から手を引かなければ、ロシアで恐怖を引き起こすとの脅しを行ったという。プーチンは、「宗教的扇動とテロリズムはサウジアラビア内に跳ね返る両刃の剣であり、あなた方がコントロールができなくなる恐れがある。宗教的扇動とテロリズムを支援することは止めるべきだ」と突き放したという。

しかし、同月末、冬季オリンピックの開催予定地ソチ会場から 650 ㎞（400 マイル）離れたヴォルゴグラードで、2 日間にわたり連続爆破テロ事件が起きた。

ロシア連邦保安局（FSB）はヴォルゴグラードのテロ爆破事件の背景には、シリア問題があり、その背後にはサウジアラビアの影がちらついているというレポートをプーチン大統領に提出している。

サウジアラビアは、このように飴と脅しの両面から露骨なまでの対ロ工作を行った。しかしそれが失敗に終わり、それ以降、これほどの対ロ工作は伝わってこない。

（4）サウジアラビア―アルカイダ―イスラム過激派組織 IS の繋がり

サウジアラビアについては、2013 年 10 月、シリアの駐ヨルダン大使バハジャト・スレイマン（当時）がウェブサイトで、「（イスラム教スンニ派）アルカイダの現在の指導者アイマン・ザワヒリは見かけ上の指導者にすぎず、（スンニ派）サウジアラビアの諜報長官バンダルこそが実際の指導者である」と語った。

先のロシアのヴォルゴグラードのテロ爆破事件の自爆犯たちがいた地域も、急進的ワッハーブ派[6]サラフィ主義[7]とタクフィリ反体制勢力[8]が占拠したシリア

6　イスラム原理主義の源泉となるのが、ワッハーブ派の思想であり、その思想で国家を成り立たせてきたのがサウジアラビアである。

7　サラフィ主義とは、サウジアラビアにルーツを持ち、コーランの厳格な解釈を主張する考え方で、自分たちこそが“真の”イスラム教徒であると訴える。ただし、サラフィ主義者のすべてが、暴力的な、いわゆるサラフィ主義戦士ではない。
若いイスラム教徒たちがより広範なイスラム世界との様々な接触や交流によって、ソ連崩壊後の北カフカスで起きた宗教復興につながった。そうした若者たちの多くが、中東のイスラム教国を訪れ、イスラム教の教育機関や大学で学んだり、ハッジ（聖地メッカおよびメディナへの巡礼）を経験するなかで、サラフィ主義およびその他の急進的イスラム教の考え方に出会った。サラフィ主義は、様々な外国のイスラム基金や組織の努力によって、北カフカス地方にも広まっていった。

8　タクフィリ（背教者だと非難する者）精神は、中東とりわけシリアとレバノンで

領にあり、サウジアラビアによってコントロールされ、資金を供給されていた。

そうした経緯からしてもアルカイダの流れをくむイスラム過激派組織 IS とサウジ家とは強いつながりがあることは確かだろう。

5　トルコ―サウジアラビアの連帯を強める共通の要因―イスラム過激派組織？

一方、2015 年 11 月トルコがロシア軍機を撃墜したことに関し、プーチン大統領は同月末、その撃墜はトルコがイスラム過激派組織 IS からトルコへの石油供給ルートを守るためだったと述べ、トルコとイスラム過激派組織 IS との密接なつながりを明らかにした（トルコ大統領はこれを完全否定）。

さらにロシア軍は、トルコ大統領の息子がイスラム過激派組織との石油取引のボスであるとする証拠を示し、プーチン大統領が指摘するトルコとイスラム過激派組織 IS とは深い関係があるとする主張を補強している。

もしそうだとすれば、トルコとイスラム過激派組織 IS の実質的支援者サウジアラビアとはこの点でも（秘密裡の）連帯が容易となるだろう。

6　ロシアとアメリカの主導下で停戦実現

しかし、現在、シリア情勢は、トルコとサウジアラビアの思惑と異なる方向に展開しつつある。

シリア（やアフリカ等）からの大量の難民の流入に困り果て、シリアの和平を望む欧州事情を背景に、シリアの早期和平を希求するロシアとアメリカの両大国は、まずはシリアで停戦が必要不可欠だとして、その実現を図って来た。

その努力が実を結び、ロシアとアメリカはよやく 2 月 22 日共同声明を発表するに至った。それによる停戦の条件は次に通りである。

●シリアの政治移行行程などを定めた国連安保理決議の受け入れ

●全ての攻撃の中止

の動き、および中東の歴史、将来、共存を標的としている。

●支配地域拡大の中止
●人道支援の受け入れ
●自衛のための反撃時に過度の武力を用いない

停戦は、現地時間の 2 月 27 日午前 0 時（日本時間の 27 日午前 7 時）から実施されることになった。

7　不満を募らせるトルコとサウジアラビア

この停戦と和平協議の動きは、トルコとサウジアラビアにとっては、最もまずい展開である。

というのもこの停戦では、イスラム過激派組織 IS や国際テロ組織の「ヌスラ戦線」、及び国連安保理がテロ組織に認定した組織には適用しないという例外規定が設けられているからである。

シリア政権とロシアは、イスラム過激派組織 IS に対する攻撃を行うとの名目で反政府勢力を攻撃できる。しかし、トルコはシリアのクルド人組織（PYD）に対する攻撃はできなくなった。またサウジアラビアもイスラム過激派組織 IS などを通じて、アサド政権打倒を目指す軍事行動が禁止されることになった。

この結果、ロシアとアメリカ主導の下での停戦は、トルコとサウジアラビア、（そしてイスラエル）に強い不満を抱かせる状況となっている。

8　トルコとサウジアラビアによる停戦破りの懸念

トルコとサウジアラビアに強い不満を残したこの停戦は、今後維持されるだろうか[9]？

トルコとサウジアラビアは、前に述べたように地上侵攻も辞さずとの意思を

[9]　イスラエルはロシアがシリアで空爆を行うようになって以降、シリア領内への軍事行動は一切差し控えるようになっている。昨年 9 月、ロシアが空爆を開始する前後、イスラエルは首相を初め軍の首脳が繰り返しモスクワを訪問し、プーチン大統領を初め軍の要人等と会談を行っている。結局、その訪問はロシアの空爆の意思を確認した結果に終わったことになる。

示し、共同作戦を行おうとしており、その意志は基本的には変化していないとみられる（軍事行動の場合、軍事力の点からトルコが主体となるだろう）。

（1）トルコの戦闘意思を抑えている要因

これまでトルコの地上侵攻の意思は、次のような事情（要因）で抑制されていたと考えられる。

第一に欧米諸国はトルコを支援するとの立場を明示せず、むしろ対決を回避するように説得する姿勢を取っている。アメリカはシリアどころかイラクからのトルコ兵の撤収さえも求めており、アメリカの空軍機もトルコ基地から撤収し、イギリスの基地へと移転させた。トルコ等がシリアで地上作戦を行うことには反対の姿勢を明示している。

第二にロシアとの軍事紛争が生起した場合、ロシアは戦術核を使用する恐れがあることである。米国のジャーナリストがプーチン大統領に近い筋から聞いた話として、ロシアのプーチン大統領はトルコのエルドアン大統領に、ロシアはトルコの攻撃からシリア軍を守るため、戦術核兵器を使用する準備をしていると警告したと言う。

これに対し、もしロシアとの紛争が起きた場合、アメリカを含む NATO は無条件でトルコを支持しないとの立場を明らかにしており、NATO からの支援を引き出さない限り、さすがにトルコ単独での戦いは困難であると認識せざるを得なかった。

（2）無視できない武力紛争勃発の可能性

しかし、停戦間、シリアの北部地域でクルド人組織（PYD）が勢力を拡大し、そしてトルコ国内のクルド労働者党（PKK）と連帯を強めていった場合、トルコ政権は果たしてそれを見過ごすだけの忍耐力を持ち得るだろうか？

非常に難しい情勢になるだろう。トルコはシリアのクルド人組織（PYD）への攻撃を砲撃だけにとどまらず、地上侵攻を行うかもしれない。

もし、トルコがその行動を開始すれば、サウジアラビアもトルコとの共同行動を取り（トルコへの増援部隊として地上部隊を派遣し、資金提供等を実施）、反政府勢力への支援（資金及び武器供給等）も一層強化するだろう。

シリアの停戦は破たんし、“ロシア”と“トルコ＋サウジアラビア”間の緊張

も高まり、武力紛争の可能性も一挙に高まるだろう。

その武力紛争勃発の舞台は、シリア領内だけにはとどまらない。たとえばトルコ領内のボスポラス海峡・マルマラ海・ダーダネルス海峡でも起こり得る。実際に昨年 12 月、ボスポラス海峡通過時のロシア艦船から水兵が携帯ミサイルを沿岸都市部に照準したことが問題になった。

もし、モントルー条約 21 条に基づき、トルコがロシア艦船のボスポラス海峡・マルマラ海・ダーダネルス海峡通過を禁じた場合、ロシアは黒海と地中海の海上往来ができなくなる。シリアのロシア軍への補給もこの海上通路を通じて行われていることから、事態は一挙に緊迫化するだろう。

ボスポラス海峡・マルマラ海・ダーダネルス海峡

トルコがロシアと戦う事態になれば、無条件では支持はしないとしていた NATO も最終的にはトルコ側に立って参戦せざるを得なくなるだろう。

この結果、ロシアとトルコとの戦いは中近東にとどまらないものとなり、我が国を初めとする国際社会に与える影響は予測しがたいものになる。

9　改めて問う、ロシア軍情報機関のトップの暗殺者は誰か？

以上の情勢と予測を踏まえ、あらためてロシア GRU 総局長セルグンの暗殺について考えてみたい。暗殺が事実だとして、トルコがそれに関与した（暗殺者）というのは真実だろうか？

もしトルコが暗殺者だということが露見すれば、同国に対する国際社会からの視線も厳しくなるだろうし（これは、今のトルコにとっては好ましい情勢では

ない)、前に述べたように、ロシアとの関係は抜き差しならぬことになる。

しかもロシアはもともとシリアのアサド政権の支援で軍事介入したものである。トルコはむろんシリアのアサド政権の打倒を望んでいるが、それはシリア内のクルド人組織（PYD）の勢力拡大阻止・打倒に優先するものではない。

これに対し、アサド政権打倒に強い熱意を示しているのは、前に述べたようにサウジアラビアであり、同国は昨年 12 月にはスンニ派諸国による「イスラム軍事同盟」の設立を発表し、シリアのアサド政権を支持するイランとも断行した[10]。

このような情勢からすると、シリアのアサド政権支援を目的として活動するロシアの軍情報機関のトップの排除（暗殺）の必要性があったのは、トルコ政権（情報部）よりもサウジアラビアの政権（情報部）側にあったとみてよいのではないか。

たとえトルコが関与したとしても、あくまで暗殺を主導したのはサウジアラビアで、トルコはその補助者にすぎないとみられる。

セルグン将軍暗殺事件の情報は、その信ぴょう性の如何に関わらず、ロシア軍の情報部門のトップがシリアに赴いていたというのは事実であり、中近東ですさまじい情報・工作合戦が繰り広げられていたことを窺わせるのに十分であった[11]。

情報・工作活動は今なお活発に繰り広げられており、その活動ぶりは停戦と和平実現の行方を大きく左右するかもしれない。

ロシアは情報・工作戦という意味でやはり恐るべき大国である。我が国は情報・工作戦で全く後れを取っていることに改めて気づかざるを得ない。

今後、シリア情勢では、シリアのアサド政権を巡る動きのなかで、“ロシア”と“トルコ＋サウジアラビア”の対立の行方が、大きなリスク要因になりつつあることに注意したい。

10　サウジアラビアが盟主の湾岸協力会議（GCC）加盟国の中で、イランと断交したのは同国とバハレーンのみ。

11　GRU の後任のコロヴォフ新総局長は情報畑一筋であり、GRU 任務にも精通していることから、任務の引継ぎを早期に済ませ、近い将来、シリアに向かうだろう。